



会報 第15号

業部 農窓 所同人集所印 行立校行編刷ま 発県学発上印だ 木等 栃高同こ



『明日の時代を担う若人へ』

昭和十六年度卒
同窓会長

菊地恒三郎

学校教育は、未完の者に対する全人教育を目的として行われるものであり、常に将来に向けて夢や希望を胸いっぱいにしたせつつ、反面、行動に對して反省と自覚を促し、自信を与えながら根気よく続けられなければならぬものである。

本校は職業高校であり、進学の目的はあまり持ちません。農業教育を目的とするものであり、現今の子供達の目には、あま

り魅力的なものとは映らないのが現実でしょう。生徒諸君にも農業後継者として自立することを目指して学習するという意識は少ないのも事実であります。それだけに本校の教育は極めて難しいものがあるはずであります。先頃の学科再編は、そう

いった問題に応じて試みられた学習内容の見直しであります。しかし、日本農業の現状が米の問題を中心に据えることが多いため、夢のない情報が多く、生徒諸君に夢を持てというのも難しいことでありますし、後継者の少なくなるものも仕方のないことではあります。

食糧不足により、生産
すれはいくらでも売れる
という時代は過ぎて、消
費者を守るために作られ

た食糧管理制度は逆に生産者を守るための制度と化しています。日米の国家間の関係の中でアメリカの農産物の輸入がじわじわと増え、いつの間にか日本の食糧の自給率は三十三パーセント台に落ち込むという食糧依存型国家となってしまう、アメリカではなくして日本人は生きられない食糧事情ができてしまっています。そして今、最後の米の自由化の問題が持ち上がって

ています。一見したところでは、日本の農業の先行きは暗いようにも見えるわけがあります。しかし、現代という時代は質で勝負のできる時代でもあります。丹精を込めて作ることに依りては、日本の農業は世界一であり、米、野菜、果物、花、肉

どれ一つとして、味や質において外国に劣るものはありません。今までの農業は生産するだけの頭しか持たず、販路や競争については知らされもない状況でありました。さらに、経営規模の狭隘なことが農業の可能性を束縛していったのです。しかし、いよいよ日本の

農業もそういった制約から放たれ、規模が拡大され頭で勝負のできる可能性が開けてきたと言え

あ
い
さ
つ

学校長 木山 八郎

平成三年の新年を迎え、
同窓生各位には益々ご健

勝のこととご拝察申し上げます。創立以来、八
十三年の歴史と伝統に輝く本校は、一万二千余名
にのぼる卒業生を輩出し、
農業関係は勿論のこと、
政界、実業界など各分野
ですばらしい活躍、地元
はもとより県内外、さら
に南米ブラジル、アルゼ
ンチンと世界の国々まで
および、幅広くしかもそ
の中枢として尽力されて
いることに敬意を表する
と共に喜び申し上げます。

さて、本校において、同窓生皆様の多大なご支援、ご協力、ご指導のおかげにより、学習環境や教育の充実に年々着実に前進がみられ、深く感謝申し上げます。ところで、本年度も、ここに、本年度



『青年部に思う』

昭和五十七年度卒
青年部長 大 滝 和 弘

青年部長を引き継いで、早二年が過ぎ去ろうとしています。全く無我夢中の二年間でした。振り返ってみると、いろいろな事が思い出されます。学校祭の一般公開という大きな行事が我々役員の初めての仕事でした。今まとは違った学校祭にしようとしたため、不安ありましたが、部員の協

力により盛大にとり行うことができました。研修旅行においては、八日市場市ハウス団地視察、キリンビール工場視察と二回にわたる視察研修が行われ、充実した研修することができました。

これらの行事を通して強く感じた事は、人集めの難しさでした。青年部をもっと活発なものにする

次に、本校PTAが六月十五日の県民の日に県教育委員会より「社会教育団体として多年にわたる顕著な功績を挙げた」として表彰され、また八月二十七日の第四十四回

全国高等学校PTA大会においては「優れた活動を通して生徒の健全育成と地域の高等学校教育の振興に多大な功績をおさめた」ということで全国高等学校PTA連合会より表彰されました。これも偏に同窓生並びに地域の方々の日頃のご支援、ご協力の賜と深甚なる謝意を表します。

二十一世紀に向け、本校生への期待がますます高まっていく中で、社会に信頼され、貢献できる

人材の育成に、全職員が英知と情熱を結集し、生徒共ども努力して参りたいと存じますので、今後共なお一層のご支援、ご協力、ご指導の程をお願い申し上げます。

るには、まだいろいろな課題が残されていると思います。

青年部としての役割とは？、と思案しつつ、何もできずに二年間が終わってしまふことを深く反省しています。

今後、若い部員の力で少しでも活発な青年部となり、青年部としての役割を果たせるよう協力していきたいと思います。

最後に、御指導御協力をいただいた皆様に感謝いたします。

『勲一等瑞宝章
栄ある叙勲を受けて』



昭和十年度卒業
前衆議院議員
田中 秀吉

平成年十一月三日、
べきものであります。

文化の日。定例の叙勲の日に当り、勲一等に叙せられ瑞宝章を授与されました。勲記は次のとおりであります。

『日本国天皇は広瀬秀吉を勲一等に叙し瑞宝章を授与する』

平成年十一月三日皇居においてみづから名を署し璽をおさせる

天皇御名 日本国璽
平成年十一月三日
内閣総理大臣 署名
内閣 勲局長 署名

このような叙勲をいただいたことは国民の一人としてこの上なき光栄であり、感激の至りでありました。十一月八日夫妻そろって宮中に参内、松の間において、平成年から直接勲章を授与され臨席した総理大臣から勲記を受けたのであります。

天皇御みづから「明仁」と勲記に署名され、天皇御自身の手から勲章を授けられるのは勲一等以上に限られております。このことに想を致すとき感激は一人身に沁みるものがありました。

特に、平成年秋の叙勲は、昭和六十四年一月七日まで続いた裕仁天皇の崩御によって明仁天皇即位御最初の叙勲であったことを想い合わせますと誠に千載一遇の記念す

黄綬褒章受賞
『家畜を診て四十五年』



昭和十七年度卒業
中村支部
高野 平八郎

私は第二次大戦が激しくなつた昭和十七年十二月に、繰り上げ卒業しました。その頃の農学校生は、徹底した軍事教練のもと、校長から担任、上級生と下級生が、組織化された軍隊生活同様の毎日を強いられ学習しました。農場は役畜として馬を飼育していましたが、農馬から軍馬を養成する飼育方法に切り変り、当番生は、飼料の準備をしたり、乗馬訓練や重量の

私は第二次大戦が激しくなつた昭和十七年十二月に、繰り上げ卒業しました。その頃の農学校生は、徹底した軍事教練のもと、校長から担任、上級生と下級生が、組織化された軍隊生活同様の毎日を強いられ学習しました。農場は役畜として馬を飼育していましたが、農馬から軍馬を養成する飼育方法に切り変り、当番生は、飼料の準備をしたり、乗馬訓練や重量の

物質の運搬などのための、馬の取扱い方について学びました。報徳寮での数カ月間の合宿生活は、今でも忘れられません。

同級生の中には、飛行兵として志願したり、幹部候補生として、士官学校へ入学した者もありました。私は軍馬の獣医を希望して獣医学校へ行き、望した時は、終戦後でした。私は、いろいろ考えましたが獣医師を志し、

栃木市の有名な先生について、見習実習を行ない、昭和二十三年に開業することができました。

当時の農家は、畜力利用の経営が主で、馬を二頭飼育していました。病の予防にと、農家を巡つて治療を続けていました。芳賀郡内から、上三川、南河内方面と広い地域でしたが、電話もなく、道路も悪く、電灯の無い家庭もありました。急病で迎えをうけ、畜舎へ急行した時には、すでに手遅れの状態となつて、助からない馬もいました。

二十三年頃のわが国は海外からの引揚げ者で人口が多くなり、食糧不足が深刻になつて、ヤミ米

勢は一段と厳しさを増してきました。このような厳しい時代をより楽しくやり甲斐のある人生の一頁を綴ることが出来たのも多くの方々のおかげで、合いの賜物と感謝いたしております。

只今は二宮町農業青色会長として百六十余名の会員と共に記帳による、農業経営の改善と豊かな農家生活、そして納税のいく納税義務に取り組んでいるところであります。

今かい農業士現役を退くに当たり過去十有五年の出来事が思い出されま

す。産業の民営化による合理化政策、米の過剰による水田利用農業確立対策事業一層の弾力推進等々加えるに近年農業後継者の農業離れ、就農者の高齢化、農業をとりまく情

況が厳しくなつてまいりました。農業経営に

人となるよう農業経営に

人となるよう農業経営に

『名誉農業士になつて』



前副会長
昭和十六年度卒業
名誉農業士
小倉 信義

永かつた昭和も終り新しい平成の時代になりました。平成二年一月十九日県公民に於いて知事さんより名誉農業士の認定証書を苦勞を共にした妻同伴で受けることが出来ました。農業人としてこの上もない誇りと喜びがありました。

農業士制度が四十七年度に制定され四年後の五十年度に農業士に認定されるの間十四年余自らを律して地域に恥ない農業人となるよう農業経営に

人となるよう農業経営に

人となるよう農業経営に

人となるよう農業経営に

人となるよう農業経営に

『地域農業の活性化』



昭和二十三年卒業
山前支部
名誉農業士
染谷 鉄雄

西沼地域は真岡市役所から南に二キロ、五行川東部に位置し、二九四号バイパスが走り平坦な水田地帯です。戸数五十七戸（非農家含む）農地面積四十六ヘクタール、一農家当たり約一ヘクタールで小規模な集落です。

当時は、米麦ブラス玉葱が主な作物で、農閑期には出稼に行く農家が多かりました。

昭和三十年、経営の転換を図るため農研クラブが中心になつて集落の話し合いを進めました。その中でより生産性の高い作物かつ出稼以上に所得の上がるものとして、イチゴを導入し、（ダナリ露地）栽培を開始、その間いくつもの問題点が生じたものの関係機関の指導助言を戴くと共に、先進農家の視察等、研修を重ね生産農家の努力によって、成果を上げるこ

とができました。さらに規模拡大と併せて天候に左右されない単棟ハウスに切り替え、山あげや株冷栽培と前進化され益々生産農家の連帯感も深まり技術を向上し、高い販売実績を上げるまでに米依存からの脱却にもつながってまいりました。

またイチゴ栽培が多様化されていく中、高品質の生産と早出しにより、

長期出荷と安定した収益を上げるため、ウォーターカーテン、（女峰）による夜冷栽培やポット栽培に変わりました。現在、生産農家十九戸で共同作業可能な、移植、ハウスビニール張り、マルチかけ等々（二グループ三戸（五戸）で助け合いながら頑張っています。特に生産者の親睦をかねた反省会や慰安旅行は楽しみの一つとして前々から実施しています。

一方トマト生産農家五戸では昭和四十八年県単農業近代化事業による、モデルハウス（大型施設）に指定を受けました、仲間はその目的役割を果たして、当市園芸振興の一翼を担ってました。さらに高度な技術を生かし連作障害の少ない、ロックウール栽培を取り入れて所得を伸ばしているところ

です。

また若妻を中心とした集落における組織的な活動は混住化が進む中で非農家とのコミュニケーションをとり、むらづくりに先導的な役割を果たしてきました。以上のような試みによって地域全体の利益と活性化をもたらすことができ現在に至っています。

真農高校訓

今日をあるを

感謝し

最善を

つくす

『農業士になつて』



昭和三十六年度卒業
上三川支部
農業士
上野 忠 男

私は、昭和三十六年に本校を卒業して、「良き農村の指導者に成れ」を教訓に、本校を卒業して親子で、夢のある農業が出来ると思つた矢先、父が不慮の事故に会い、そのためすぐに、経営主となりました。

水稲十干瓢十養豚の経営を続けてきましたが、昭和四十五年頃から米の生産過剰時代が訪れ、減反政策の波が押し寄せてくるという、背景がありました。このような転換期を迎え、水稲を基幹とした経営の全面的な見直しを図り、いちご栽培を初めた訳です。いちご栽培

確保に努め、さらに部会員と共に、有機栽培に取り組む消費者ニーズにあつた、実質のいちご作りに努力してきました。

又、農産物の貿易自由化、国際農業の時代と新聞やテレビ等で報道され、又、兼業化が進行し農業の担い手として、経営の体質強化が最も重要な課題であると思う。

地域農業の今後の発展方向は、水稲、麦は土地集積により大規模化をはかり、農協等々のライスセンターを有効に利用し、生産コストの低減をはかることと、野菜中心とした首都圏農業の確立にあると思います。現在上三川町の青果物の生産者は、青果物販売額三十億円を目標に、栃木県における「首都圏農業の中心」との自覚のもとに努力して

『農業に希望と自信を』



昭和十五年度卒業
中村支部
真岡市収入役
田 上 進 一

昔から、日本人はコメで生きてきたが、食生活の変化により、一人当たりの消費量は、昭和四十年当時から見ると、平成二年には六十%強にまで落ち込んでいと言われている。過剰米からくる毎年続く生産調整が、強いられ続けているのも当然であります。精魂を込めて生産に頑張つて来まして農民にとって、コメの

生産調整がこれ以上続くことは、耐えられないこの変化により、一人当たりの消費量は、昭和四十年当時から見ると、平成二年には六十%強にまで落ち込んでいと言われている。過剰米からくる毎年続く生産調整が、強いられ続けているのも当然であります。精魂を込めて生産に頑張つて来まして農民にとって、コメの

『我が家の農業経営』



昭和二十一年度卒業
七井支部
加 藤 博

県と下野新聞社が共催する栃木県農業経営コンクールに関係機関のすすめもあつて、平成元年度参加をいたしました。はからず優秀賞を受賞いたしました。普通作物部門から畜産、果樹、養蚕、花卉、特作部門など十一部門に分けて審査されるわけですが、私の場合、益子町の特産物として長い歴史を持つ葉たばこが中心の経営で、コンニャクとたばこは特作部門に入るわけです。農学校卒業以来、昭和二十二年からたばこ耕作に従事して四十三年間精魂を打込んで

県と下野新聞社が共催する栃木県農業経営コンクールに関係機関のすすめもあつて、平成元年度参加をいたしました。はからず優秀賞を受賞いたしました。普通作物部門から畜産、果樹、養蚕、花卉、特作部門など十一部門に分けて審査されるわけですが、私の場合、益子町の特産物として長い歴史を持つ葉たばこが中心の経営で、コンニャクとたばこは特作部門に入るわけです。農学校卒業以来、昭和二十二年からたばこ耕作に従事して四十三年間精魂を打込んで

関税貿易一般協定新多角的貿易交渉の、農業交渉で、日本がコメ安全自給の最大のよりどころにしている、日本の食糧安全保障論は、ピンチに立たされていきます。加えて就農者の高齢化、若者の農業離れが、着実に進んでいる現実を考えると、まさに日本農業の前途は危機的な局面を、迎えていると言つても過言ではありません。

我々は、今こそ農業者個人から集落の衆知を結集して、今後の農業のありべき姿を、模索し外国農業に太刀打ち出来る、足腰の強い農業の確立を

夕方おそくまで作業がかかることが度々でした。それでも家族労働力では足りず日雇いをお願いしていた。

五十三年前頃からコンテナ乾燥機を導入（現在六台）更に葉編機を入れて使用する様になってから収穫乾燥の労働時間が大幅に短縮され、現在では二ヘクタールの収穫乾燥は家族労働で間に合う様になりました。私は若い頃から、青年団やPTA、消防団、農業委員、町議会など、社会奉仕活動に情熱を傾けながら、たばこ作りと両立させることを常に課題としながら、育苗の共同化をはじめ、省力栽培と、労力の配分と調整を考えたが努力して参りました。

五十八年には樹園地を開墾し圃場の整備を行つたので機械の高度利用が



30年ぶりに来校の南米移住者

優良農家紹介



昭和四十四年度卒業
山前支部
藤 井 勉

私は昭和四十四年度に真農を卒業後就職しました。母の栽培技術は、年々目まぐるしく変わっていき

我が家は、真岡市の南東部に位置した山前地区の農村地帯であります。卒業後は、農家の長男という事で何の抵抗もなく農業に従事しました。

当時の我が家では、米、たばこ、苺の三本柱の経営でありました。たばこは、一三〇a作付をしていたのですが、山前地区の水田地帯ではどうしても良質のものが出来ないという事で昭和五十四年に断念致しました。

山前地区東部土地改良が、昭和五十三年頃に完成と同時に、営農集団を五人の仲間と共に結成、大型機械を購入し、育苗代かき、田植え、稲刈り、耕起、などの作業請負を始めた。

機械化が進むにつれて母栽培を主とした農業経営に変わってつありました。無加温単棟ハウスでダンナから、後継者育成資金を借りて、連棟ハウス(電照)で宝交早生、三年目で、千葉県からレイコが入って来て、三年間栽培し、現在は、栃木県が、研究して生み出した女峰を栽培しています。女峰に変わってからの、



昭和三十六年度卒業
中村支部
石 川 進

私は昭和三十六年度真農を卒業し農業に従事しました。当時を振り返って見ますと殆どの農家が米麦中心の農業でした。私の家でも米麦干瓢中心の経営でしたが干瓢は価格の変動が激しい為、これに変わる作物として昭和四十一年度からPメロン

の作付を始めました。この頃の作型は小トンネルでPメロンは自根栽培でした。栽培面積も少なく二十a位の面積でしたが年々栽培面積も増えましたが消費者側の要求も年々変わり、量より質へ又、早出し出荷が要求されるようになってきました。これに対応しなければ産地として残れないと時代も変わりました。この為、先進地である茨城県旭村へ研修をしパイプ

より田植機、コンバインを導入しました。無加温栽培で前進栽培するにはハウスの内へ二重トンネルをし、また地温を上げるには太陽熱を利用した湯タンポ栽培を取り入れました。この結果県内で四月出荷は難しいとされた四月出荷が出来ました。現在、わたしの家ではPメロンの作付面積は一〇〇a程の作付ですが、栽培管理又出荷等の労力配分を考え、はや出し四月出荷四十a、五月上旬出荷六十aの作付です。メロンの後作に夏秋茄子を昭和四十二年から取り入れています。当時は水稲の作業は全て手作業だったので水稲の収穫と茄子の収穫が重なり作付面積も少なく三十a位の作付で精一杯でした。その後昭和四十五年の頃から水稲栽培は機械の近代化により田植機、コンバイン



昭和四十一年度卒業
中村支部
関 川 幸 雄

私は、昭和四十一年度本校を卒業し、農業に従事しました。当時殆どの農家に同じ年代の後継者が居り、その仲間入りをした訳です。

我が家では、工業団地の南端の西側に隣接した所にあり、工業団地の企業の操業と同じ頃就農しました。水稲・麦・干瓢・陸稲・落花生・和牛の肥育増反をし、中村地区の特



昭和五十三年度卒業
益子支部
石 川 尚 通

大変優秀な先輩、そして後輩が大勢いるにもかかわらず、同窓会の優良農家の表彰を受けまして、大変光栄に思うと共に、大した経営もしていないのに恥かしい様な思いがします。

私は、昭和五十三年度本校を卒業し、千葉大・学園芸学部・園芸科に置きまして、二年間果樹関係、梨について研修してきました。農業に従事して十年になります。

現在の我が家の経営は、水田一〇〇a、畑五五a、梨園九五a、梅園七a、椎茸原木で四〇五万本であります。労働力は、父、妻と私の四人です。椎茸の収穫、その他に手伝いを頼む場合は、殆ど家族の労働力でこなしています。椎茸栽培は、生椎茸の出荷も少しは行な

製品として、京浜市場の評価も得るようになって来ました。生産性の高い農業を目指し昭和四十八年に母のハウス三〇〇坪の栽培も始めました。当時の労働力は、両親、私と妻の四人で適期、適作業に心がけ作業日誌も毎日記入する事にしました。昭和五十四年、プリンスメロンの中型ハウスの導入により母の栽培を止め、プリンスメロンの前進化を図りました。全体の流れでもあったような気が

現在の経営状況は、家族六名で労働力は二人です。作目は、畑作でプリンスメロンの中型ハウス八十a、夏秋ナス四十a、落花生その他、七十a、落ち葉用山林五十a等。ハウスの導入、夏秋ナスのV字型誘引栽培により、前進長期、安定多収、高品質化が図られるようになって来ました。反面連作障害による病害、抵抗性の強い害虫の発生等問題点も有ります。今後そ



昭和四十四年度卒業
南高支部
磯 一 雄

て行くと思います。そして、農業者として、確かな技術を習得して自信をつけることが、大切であり、そうすることにより、仕事も面白く、意欲も向上するのではないかと思います。

まだまだ未熟な私です。農業に対しての不安は、尽きません。

私は昭和四十四年度本校を卒業しました。その後五年間ぐらひは農業に専念していませんでした。私の地域の農産物は梨・稲が主な作物です。私の家では三百五十アールの米作中心の農業をしてきました。コンバインの普及により各戸での購入は負担が大変です。共同利用で作業をしてきました。昭和五十一年頃から農作業の受託集団の仲間の一員に加わらせていただき、受託作業をしてきました。最初は、肥料散布、田植え、土手の草刈り、稲刈りの部分作業が主でしたが、初めてから五、六年経過すると都合が悪くなり離農しなければならぬ農家が少し目立つようになって、農地の一時借用が出来ることがになりました。私の地区の西の方に工業団地ができたことによって農家の生産した新鮮な農作物が増えることと農業をして良かったと言っている人々が増えているかと思ひます。

四季折々変わる大自然の中で、思う存分身体を動かして、農作業ができる事を誇りに思い、これが私の大事な仕事であり、「農業で生きよう」という私の信念でありたいと思ひます。今後は、自己の目標に向かい前進して行きたいと思ひます。

歴史と伝統にささえられて



昭和三十一年卒業
中村支部
PTA会長
梅田孝一

同窓会の皆様には、常日頃、何かと温かいご理解とご支援をいただき、誠にありがとうございます。本年度は、先輩の皆様方が築きあげて下さった伝統を守り続けてまいりました。真農高PTAの、人間愛あふれる活動が認められまして、栃木県教育委員会賞並びに全国PTA会長賞を、続けて受賞することができました。これもひとえに、真農高を愛する同窓会の皆様方の、惜しみないご協力のお蔭によるものと、PTA一同、心より感謝いたしております。

又、受賞祝賀会開催に際しましては、物心両面にわたってのご援助を賜り、心より御礼を申し上げます。

学校側では、校長先生をはじめ先生方一丸となつて、時代に即応できる人材の育成と、生徒一人一人の個性を生かす教育に取り組んでおられますが、私達PTAも、先輩の皆様方が敷かれた活動の方針である「交通事故の防止」及び「中途退学者の防止」に重点をおき、「家庭教育の充実と強化」「支部活動の活性化」を目指して、昭和六十三年より今日まで活動を続けてまいりました。幸いに

コンロンの頂へ



本校教諭
滝田道明

私たちが栃木県高体連登山部中国崑崙山隊24人は、90年8月18日、中部崑崙山脈の幕士山（ムスターグ6、638m）の初登頂に成功した。この山は、85年に日中婦人友好登山隊が試みたが失敗し、未登のまま残されていた。7月26日、ジープに分乗して、シルクロード西域南道のホータンから、山奥の村タイティに。そこからロバ、ウマ74頭に隊荷を乗せ、キャラバンとなった。4、180mのモレーン上にBCを建設、7月31日、北面のムスターグ氷河上のC1、BCでは一隊員が高所障害で意識不明、二日かけて3、500mのアクタシ村に下ろした。8月5日、ムスターグ氷河最奥部にC2（5、440m）を設け、400mの氷雪壁にルートを開いて東稜に出る。C3は7日、東稜上5、860mに置く。ルート作業は6、120mまで順調に進み、8月12日にアタックを試みた。しかしルートが長さと、午後からの天候悪化で6、230mで断念。悪天の降雪は8月15日まで続き、一旦BCまで全員ひきあげ、休養。この間に、C2のテントが落石でつぶされ、中に人が覆ていず、胸をなでおろした。隣の天山山脈では、ホテルで

『青年部研修に参加して』

同窓会青年部事務局
鷺谷雄一

十二月五日、本年度の青年部研修を本県の高根沢町にありまきりんビールの栃木工場を見学いたしました。近年水田の休耕田にも麦を作るようになった。研修者一同関心をもつて研修いたしました。

栃木工場では一日の工場見学者が三百人以上も来社するそうです。ビールの主な原料は、ビールの大麦・ホップ、副原料として、米・コーンスターチと、清らかな水で作られるそうです。ビール大麥については国内産だけ

十二月五日、本年度の青年部研修を本県の高根沢町にありまきりんビールの栃木工場を見学いたしました。近年水田の休耕田にも麦を作るようになった。研修者一同関心をもつて研修いたしました。

『本校卒業生 ブラジル移住者 元氣に来校』

本校卒業後、南米へ移住され、現在九名の諸氏が家族と共に活躍されていることは、昨年の会報でお知らせしました。

本年度、国の「ふるさと創生事業」の一環として、移住後まだ帰国してない方々を対象に、出身県への一時帰国が実現しました。本県出身の中に、本校卒業の早瀬好夫氏（昭三十二年卒、ブラジル・アバエテ在住）と、佐々木敬雄氏（昭三十六年卒、同・トメアス在住）が含まれ、去る十一月十三日（火）に約三十年ぶりに母校を訪問されました。

本校卒業後、南米へ移住され、現在九名の諸氏が家族と共に活躍されていることは、昨年の会報でお知らせしました。

『先輩の歩みが後輩の励みに』

進路指導部長
西岡隆義

行先が不透明で見通しの効かない時代と言われながら、ここの二年の就職状況は堅調な景気拡大で各企業の求人意欲が強く、いたって順調に高い内定率をあげております。かつて就職戦線に暗雲が立ち込め、厳しい就職状況の中で本校を巣立つた同窓生諸氏にとつては今の十倍を超える求人倍率などは全く想像も出来ないことと思います。

ただ、こうした好景気の影響が全てにプラスとして働いているかという点と必ずしもそうとは言えず十分な就職準備や検討もせずに安易な職業選択となりがちで、短期間での転職にもつながる心配があります。厳しかった時代の就職者には、入社試験に対する周到な準備や働くことへの強い意欲がみられ、職場でも高い評価を受けている人が多いようです。

求人窓口におりますと「真農高の卒業生は真面目で、学校長より心温まる激励文をいただき一同感謝の念で一杯です。」とお礼があり、移住者皆様より本校へ記念品が贈呈されました。

また、七月には大根田恒春氏（昭三十五年卒、ブラジル・トメアス在住）が元氣に母校を訪れ、「昨年度の在伯栃木県人会三十周年並びにアマゾン日本人移住六十周年記念に際して、本校卒業の南米移住者九名全員に同窓会及び学校長より記念品や慰問金、さらに同窓会長、学校長より心温まる激励文をいただき一同感謝の念で一杯です。」とお礼があり、移住者皆様より本校へ記念品が贈呈されました。

「真農高の卒業生は真面目で、学校長より心温まる激励文をいただき一同感謝の念で一杯です。」とお礼があり、移住者皆様より本校へ記念品が贈呈されました。

表 1. 3 学年 (確定) (単位: 人)

	自営・在宅	進路希望	就職
自営学科	1	9	7
食品化学科	0	0	5
生活科	1	2	10
計	2	11	22

表 2. 2 学年 (進路希望)

	自営・在宅	進路希望	就職
自営学科	3	8	17
食品化学科	1	0	4
生活科	0	0	22
計	4	8	43

表 3. 1 学年 (進路希望)

	自営・在宅	進路希望	就職
農業経営科	11	9	14
農業機械科	0	0	7
食品化学科	0	1	11
生活科学科	1	1	28
計	12	11	60

活動報告

生徒会の一年

生徒会顧問 橋 本 真 司

生徒会活動は、会長の鶴見英樹君を中心に、十六名の役員と顧問が力を合わせて、多くの行事を運営してまいりました。

今年度も、今までと同じように、「生徒たちによる自主的な生徒会運営」ということを基本にして活動を指導してまいりました。

平成二年度の行事を振り返りかえってみますと、一学期は部活動紹介、常任委員会、益子養護学校との交流会、生徒総会、球技大会、野球部の応援。二学期は体育祭、益子養護学校運動会への参加、学校祭、スキー教室などがありました。

部活動紹介では各部長が新入生を前に自分の部の紹介をするわけですが、部活動の活動状況が一つ一つ思わしくない状態であるため、一人でも多くの新入生を自分たちの部に

入部させようと熱弁をふるっていました。(射撃部、山岳同好会は先生が登場しました。)益子養護学校との交流会は今年で二年目をむかえ、去年とは違い生徒たちも最初から積極的に行動できるようになりました。農場での交流は、きれいな草花や豚や牛を見て、はしゃぐ益養校生がとても頼もし

く思いました。二学期の運動会参加は、二年生が中間テスト前であったため、三年生が中心となりましたが、競技に必要な用具をテキパキと準備する男子生徒、車イスの益養校生徒をやさしく介護する女子生徒と、わたしが口を出す必要が全くな

農業クラブの一年

農業クラブ顧問 河原井 英 男

今年度は、農業クラブ連盟結成四十周年という節目の重要な年でもあり会長の伊東徹也君を始め十九名の役員、顧問一年生である私共々、重責を感じながらの幕開けとなりました。しかし、平成二年度も、県連盟結成四十周年記念大会、校内プロジェクト発表会、総会を残すのみとなりました。農業クラブの競技には、意見発表、プロジェクト発表、農業鑑定競技、家畜審査競技、測量競技があり、各競技に本校クラブ員(生徒)も出場しました。

意見発表では、校内大会で、最優秀を獲得した。農業科三年藤田勝典君(農業経営に関する部)、食品化学科三年小宅孝一君(農業関連産業に関する部)、生活科三年高橋めぐみさん(農業生活や農村に関する部)の三名が小山園芸高校で実施された県大会に出場し、健闘しましたが、惜しくも関東大会の切符を手にすることはできませんでした。

プロジェクト発表では、関連産業に関する部および生活に関する部の二部門の発表が宇都宮農業高校で実施され、関連産業に関する部に出場した、生活科二年篠原寿江さん他七名の発表が見事、最優秀賞に輝き、九月に神奈川県で実施された関東大会に出場しました。結果は優秀賞でしたが、落ち着いた発表態度で、生徒達も成せば成るとい

う自信を深めたようです。農業鑑定競技では、農業科三年藤田勝典君、食品化学科三年菅谷百合子さん、生活科三年上野早苗さん、糸賀正代さんの四名が校内大会の優秀者として、記念大会ということで東京とで開催された、全国大会に出場しましたが、残念ながら、入賞を果たせませんでした。

長期に渡る資料収集のための個人学習や合宿での学習会も、互いに協力し合い良い勉強になったと思います。

家畜審査競技では、生活科三年糸賀正代さん、農業科二年の篠崎達也君が入賞しました。

測量競技では、農業科三年阿久津哲也君、大滝富士夫君、亀倉知君の三人が出場しましたが、今

一度は、役員と福祉委員と希望者にしました。家庭科の授業の一環として老人介護等の学習を、老人ホーム研修という形で女子生徒全員に体験させてきました。

また、今年度は県農業クラブ連盟に、国際化にふさわしい新事業、オランダ派遣農業研修が導入され、各校より選考された十名が酪農国オランダに七月十日から八月十日までの一カ月間に渡る研修をしてきました。本校からも畜産科三年岩淵隆之君が選ばれ、数多くの

貴重な体験を肌で感じながら大きく成長して帰国しました。来年度も畜産科二年の高松秀樹君が選考され、参加の予定です。最後に、各種発表競技

に参加した生徒はもとより、農く活動に協力してくれた数多くの生徒と御指導頂いた諸先生方に深く感謝を申し上げます。

家庭クラブ活動について

家庭クラブ顧問 谷田部 幸 枝

今年度の家庭クラブは、会長の池田真弓さんを中心に、十名の役員、各クラスの代表員そして顧問が力を合わせて活動してまいりました。

活動内容は、家庭クラブの「創造」「勤労」「愛情」「奉仕」の精神に基づいた老人ホーム訪問・クリーン運動・保育実習・講習会・作品展示会などで昨年とは変わりましたが、今年度は、役員と福祉委員と希望者にしました。

また、今年度は県農業クラブ連盟に、国際化にふさわしい新事業、オランダ派遣農業研修が導入され、各校より選考された十名が酪農国オランダに七月十日から八月十日までの一カ月間に渡る研修をしてきました。本校からも畜産科三年岩淵隆之君が選ばれ、数多くの

貴重な体験を肌で感じながら大きく成長して帰国しました。来年度も畜産科二年の高松秀樹君が選考され、参加の予定です。最後に、各種発表競技

に参加した生徒はもとより、農く活動に協力してくれた数多くの生徒と御指導頂いた諸先生方に深く感謝を申し上げます。

最後に、各種発表競技に参加した生徒はもとより、農く活動に協力してくれた数多くの生徒と御指導頂いた諸先生方に深く感謝を申し上げます。

「また保育園に行きたい」という言葉を時々耳にしており、これらの実践活動を通して、クラブ員が一人の人間として成長し、よりよい社会作りに貢献することを期待して筆を置きたいと思ひます。

同窓会総会・祝賀会 盛大に開催さる

平成二年度同窓会総会は、四月二十八日(土)本校会議室で開催されました。

会長あいさつ、学校長あいさつ、来賓祝辞のあと議事に入り、平成元年度会務・決算報告及び平成二年度事業計画・予算、平成元年度基本金運営費決算及び平成二年度同予算、さらに平成元年度青年部会務・決算報告及び平成二年度同事業計画・予算などが熱心に審議されました。

また、総会終了後、祝賀会並びに懇親会が市内結婚式場で五十余名の参加により盛大に行われました。受賞された諸氏は次のとおりです。

勲一等瑞宝賞 広瀬秀吉氏(昭十年卒)、黄綬褒章 高野平八郎氏(昭十七年卒)、勲五等瑞宝賞 松島憲一郎氏(大十四年卒)、農林水産大臣賞 黒崎芳氏(昭四十四年卒)

同窓会役員

◎ 本会役員

会長 菊地恒三郎
副会長 早乙女俊夫
常任理事 金敷 芳雄
青柳 宗一
菅谷 忠太
大滝 弘明
井野 博
古橋 修一

◎ 青年部

部長 大滝 和弘
部長 石塚 孝男
部長 仁平 信宏
部長 高平 登順
部長 鷲谷 英一
部長 河原 正美
部長 塚田 吉久
部長 松本 昌万
部長 佐藤 正美
部長 加藤 太
部長 木村 弘美
部長 川上 洋一
部長 小玉 貴浩

◎ 支部長

真岡 山田孝一郎
山前 山下圭治
大内 大塚 克巳
中村 川又 侃
久下田 川村 武夫
物部 野沢 弘
長沼 海野 保
益子 小出 貫凡
田野 広田源太郎
七井 佐藤 忠雄
水橋 小林 武一
祖母井 山本 豊
南高 黒崎 亨
茂木 荒井 睦夫
小貝 関沢 仙
赤羽 小林 泉吉
宇都宮 早乙女俊夫
清原 半田 光有
瑞穂野 早乙女俊夫
本郷 小口 栄敏
上三川 なし
河間 渡辺 忠雄
茨中 杉山 恵一
五所 杉山 和男
小栗 広沢 茂
岩瀬 吉田 誠義

